

《5》 オープンイノベーションで地域課題を解決する 「ローカルグッドヨコハマ」の挑戦

① 座談会 「ICTプラットフォームでコミュニティ経済を創り出す」

1 はじめに

○司会 平成26年6月にICTを活用して地域課題を解決していくための仕組みとして「ローカルグッドヨコハマ」が、市内で活動するNPOと企業によって立ち上がりました。これは、オープンイノベーションの考え方に基づいて、地域の課題を、地域の多様な主体によって解決していくICTプラットフォームとしての役割を担ってきています。本日は、「ローカルグッドヨコハマ」や横浜の地域課題解決に関わりのある方にお集まりいただき、いかに地域課題を創造的に解決し、地域に新たな価値を生み出していくのか、お話を伺いたいと思います。

【市川】 本業はアウトソーシング関連の仕事をしています。が、CSRとして、特に若者の就労支援、不安定就労問題を中心に取り組んでいます。その取組を始めるきっかけとなったのは、ITのアウトソーシングの仕事では、労働集約とフラット化するグローバルイノベーションが進む中、労働拠点をシフトなどによってビジネスを伸ばしてきました。でも、ビジネスを軌道に乗せ、周りを見渡す余裕ができた時、これでは日本の雇用を減らしているのではないかと、これは決してサステイナブルではない、という気づきがあったのです。それがCSR、特に不安定就労問題に取り組みたいという思いとなり、5年ほどニート・ひきこ

もりの問題や高校生向けのインターンシップの推進などをNPOの方々と一緒に考えていただいています。一方で、一部の志の高い人だけではなく、中間層と呼ばれる方々も巻き込んだ取組にするためにはどうすればいいのだろうかというジレンマがあったのですが、そんな時もうちよつと地域支援の人々を巻き込む形でイノベーションを創発的につくっていけないか、という話がありました。イノベーションという言葉の意味、ヨーゼフ・シュンペーターの言うところのイノベーションは結果的にイノベーションという意味ではちよつと難しいなと思うのです。

私はイノベーションは大きく2つに分類されると思っています。私が本業でやっているような労働集約型のビジネス、成熟化した産業の中でどんどん効率を上げていくというのも一つのイノベーションだと思っています。もうひとつは、新陳代謝を促す誘発的な側面を持った創造のイノベーションで、成熟して解決の糸口が見えない今となつては、組織を飛び越えて超組織的、セクター横断的な取組というのが非常に重要かなと思っています。そこにこのオープンという言葉の持つ意味合いがあると思いますし、オープンイノベーションはこれからの社会経済のあり方を模索していく中で非常に大切だなと思っています。

【影山】 オープンイノベーションについては、さしあたり、次のように説明できていると思います。現代社会においては、マーケットニーズや社会課題に対する解決ニーズ



影山 摩子弥
横浜市立大学教授
横浜市立大学CSRセンター代表



市川 博久
アクセンチュア株式会社
インフラストラクチャサービス
マネージングディレクター兼コーポレートシニアシップ推進室 若者の就業力・起業力強化チーム責任者

が高度化し個別化して—私は先鋭化と表現していますが—非常に難しくなっていますので、それに対応するためには、企業やNPO、行政といった複数の主体が対等な連携をとって進めていかないといいけない。それがオープンイノベーションだという説明です。これはこれでいいと思うのです。

ただ、もう少しマクロスコープに時間軸と空間軸で見えていくと、確かに社会が複雑化しニーズが難しくなってきたと言えらるのですが、それに対応するためには、柔軟なネットワーク型の機構が必要で、ニーズが変わったらそれに対応して社会機構も変わらなないといけない。つまり、新しいシステムが求められているのです。そのようなシステムを私は対自的感性主義と呼んでいます。

ところが我々の持っている社会機構というのは近代の理性主義が生み出したもので、企業も行政機関もハイアラキー、ピラミッド型です。NPOはネットワーク型の機構をつくっているのですが、活動領域も狭く、特殊化していますし、財務的にも脆弱性が免れないので、どちらかというとうと理性主義の間隙で活動し

ているようなイメージがあります。その中で新しい状況に対応するには既存システムで対応しなければならぬので、できる範囲でネットワーク型の連携をとって新しいマーケットニーズや社会課題の解決ニーズに対応する技術や製品、サービス、ノウハウを生み出している、と言えるのではないのでしょうか。

オープンイノベーションというのは、新しい仕組みをつくるための一つの取っかかりになっているのではないかと思っています。言い方を変えようと、目先のニーズに対応するためのイノベーションというのは、実は社会システムまで変えるような、大きなイノベーションにつながっているのではないかと。

【江森】 経済にしても政治にしても、今ある枠組み、構造というのは近代につくられたもので、その構造自体がもう限界に来ているのだと思うのです。ただ、いまだに我々はその構造の中で生きていますし、その構造に依存している形で経済も政治も回っている、出口が見えない感じだと思っております。その構造を変えていくには、それぞれのセクターが持っていたノウハウ

とか知識をお互いに交換するような形でオープンにしていかなければ無理なので、オープンイノベーションの可能性というより、それをやらないことには次のステップに進めないのだろうなと思っております。

また、先ほど市川さんがおっしゃった若者の就労支援の問題で言うと、これからソフトサービスの仕事が多くなってくると思うのですが、就労支援を受ける若者にはそういう仕事に向いていない人も多くいます。彼らが自分たちの本当の価値を生かせるような仕事というのをどう作っていきけるのかというのはすごく難しい問題と思っております。

【藤原】 私は建築家なのでオープンイノベーションという言葉は普段あまり使わないのですが、究極重要なのは社会のサステイナビリティだろうと思っております。オープンということはクローズしているものを開くということ、開いた瞬間は必ず価値が増大するのですが、持続しないと悲惨なことになって、むしろ閉じていたほうがよかったなということになってしまふ。社会のサステイナビリティ

を考えると、意外と家族構成や働き方のイデオロギーの違い、多様性がイノベーションのベースになるのかなと思うのです。核家族化、都市化、グローバル化によって地域の個性・ユニークさを失ってしまふ中で、どうしたらこれまどと違う地域のイデオロギーを形成する流れがつけられるのか。どうしたら地域や組織が多様性の受け皿になれるのか。ローカルグッドというのは、多様性が失われつつあることに対する横浜発の新しいリアクションなのかなと思います。

○司会 みなさんに共通しているのは、近代の社会構造のある意味で均質化や多様性の排除、ピラミッド型の仕組みに対して、多様な主体が共創・協働しながら課題解決していくということが、オープンイノベーションの一つの大きな方向性だろうということですね。

2 地域の課題の解決としてのオープンイノベーション

○司会 これまで自治体は、地域課題に対して市民参加とか市民協働という形で取り組



藤原 徹平
横浜国立大学大学院Y-GSA准教授
建築家



江森 克治
特定非営利活動法人横浜スタンダード推進協議会理事長

んできたわけですが、組織のあり方そのものを問い直しながら、多様な主体と平等で対等な関係で地域の課題を解決していこうというのは、経験のないことだと思います。

ローカルグッドにおいても、地域課題について多様な主体がかかわって対話をした、協働していくということ、まさに核となる部分ではないでしょうか。

【市川】 オープンイノベーションのすばらしいところは、クローズド、単体では思いもよらなかったアイデアが、ふだん出会わないような偶発性のもとでひらめくというところだと思うのです。

何かに取り組むとき、その成功と失敗の割合そのものはあまり変わらないような気がして、ビジネスの世界で言うと、例えば、起業したいと思った人が2年後に実際に起業している割合は30%、10年後には10%ぐらいしか生き残っていないかたりするので、その割合を向上させるのは難しいですが、地域社会においても何かイシューベースで取り組む人の数を増やせばと思っっているのです。取り組むといったとき、まず、異種なる者同士が出会っ

て何かを始める、その偶発性というものを起こさせる仕組み、そして、課題の可視化のようにイシューベースで内発的な動機を個人レベルで刺激していくことが重要だと思います。そして、それらをきちんと社会インフラとして整えていく。ローカルグッドは、そういう意味でオープンイノベーション的に立ち上がった超偶然だと思っっています。

また、継続性という点では、取組やアウトカムへの評価がすごく重要で、それがオープンイノベーションを誘発して維持していくために必要なのではないかと思っっています。

【影山】 偶発的に始まったものを継続しないといけないですし、インフラにしないといけません。要するにシステム化ですね。昔のシステム化というと、行政が事業計画を立てたりして進んでいくわけですが、ネットワーク型でシステムを生む際はもっとマイクロスコープで、マイクロの主体が寄り集まって「これが必要だよね」「やりたいよね」という問題意識を持つて動いていくので、主体の中にある必要性から生まれてくる形をとります。そうすると偶発的に見えますが、必然性があるので

す。

これをいかにシステムに落とし込むか、ということが課題で、単に道路や公民館などをつくれれば地域が活性化するという時代ではないのでモデルを示すことが難しい。

また、地域課題は、地域の主体が取り組まないといけない側面もあるのですが、一方で、地域の主体や仕組み自体をつくっていくという側面もあります。その中で既存の講図や仕組みを作り替えることもある。

例えば、NPOが社会課題に取り組む、企業がそれをサポートするという構図はもう古いのです。NPOも企業も主体にもなり、サポートする側にもなる。行政も積極的に中に入って汗をかかないといけない。これがまさにオープンイノベーションの意味だと思っのです。私は、ローカルグッドがこの核になると思っていますし、また、核にしなればいけないと思っっています。

【藤原】 ローカルグッドの良いところは、課題を持つて困っている人が困っている大きな声で言いつ放しにできるところです。

ネットワー

クには、どこか繋がっていない、維持しなければいけないというストレスがあります。プラットフォームと、電車のプラットフォームのように、時々来て何か活動を残していったり、知恵を残していったり、困っていると、あるいは怒ったりして去っていく。つながっている必要はないのです。何か活動を残していくということが、プラットフォームにとって重要なことで、そこでいつの間にかいろいろな仕組みが進んでいたりするわけです。

【影山】 ネットワークの定義に固定性や閉鎖性はありませんから、プラットフォームも入ります。プラットフォームは時間軸ないし動態を視野に入れた表現で、ある時点を切り取ればネットワーク型の機構です。ただ、事業の責任が



あいまいになるとか、継続や達成のための制御が不十分になる可能性があります。その点、理性主義は閉じた機構で制御を行い、たとえば、企業内に閉じたイノベーションを生みます。既存のネットワークもその影響を受けますから、固定的、閉鎖的機構となる場合もあります。

【藤原】 先ほどイシューベースというお話がありました。もうひとつローカルグッドの良いところは、組織ではなくプロジェクトベースであるということ。プロジェクトであるということは、オープンで、放たれているものなの

で、だれも抱え込んでいない。ネットワークというのは究極的には閉じているもので、参加するというところにある種の平等性を求めてくるものだと思います。NPOの活動だということですが、閉じていたから面白くないのですが、ローカルグッドはプロジェクトベースであるからこそプラットフォームたりえるのです。

【江森】 行政組織というのは最も完成された近代的組織、ピラミッド型の組織です。その組織の中で本当にオープンにできるかどうか、すごく大事なポイントだと思います。見ていると、閉じた中で役所と相手の主体との一対一の関係を保とうとしてしまうところがあって、それを壊していくというのは組織構造上なれないのだからと思います。環境さえ整えば仕組みは勝手にできていくと思うので、行政がプラットフォームをつくりましょうとなると、もうプラットフォームではなくなってしまおうと思うのです。そういう意味では「仕組みをつくる」という発想を行政の中から消していかないと。

○司会 自ずと立ち上がったプラットフォームによって

て多様な主体が出会い、しかも持続的な形で出会い続け、新たな地域課題の解決が見えてくる、というのが理想的な姿で、行政は、設計したり仕組んだりせずに、いかにしてそれを起こしていくかが問われているのですね。

【藤原】 そうですね。日本の場合、行政Ⅱパブリックと私われがちですが、パブリックというのは物凄く大きく開かれたもので、誰もが参加できるということです。行政は、アドミニストレーションというかコントロールというのをしているものなので、そこは間違えないようにしないといけない。

そういう意味で、ローカルグッドのような次のパブリックを考えるプラットフォームを対等な対話によって創る、というのは、極めて健全な思想に基づいていて、さすが横浜だなという感じがしますね。自分たちの中から「こういうことをやるべき」「パブリックという対話型で成り立つべき」というアイデアが出て、自発的な動きになったことはとても評価できると思います。

○司会 その点、企業が行う

CSRというのは、企業側からパブリックを担っていくひとつの方法だといえます。

【市川】 そもそも民間企業としてのビジネスにおいては、短期的なメジャーメントでしか評価されていません。中長期的な社会のあり方を考えてアクションを起こしたとしても、それが評価される仕組みというのがないのです。ただ、それだけではサステナビリティは担保できない。

企業のCSRでは広報・マーケティング的な要素も非常に強くて、競合他社や本業との関係を考慮する必要もあります。パブリックにおいて企業が担う役割といったとき、やはり本業で培っている、我々の会社で言えばコンサルティング能力やITを使って、何か社会的な仕組みを増幅させるようなことだと思うのですが、CSV、いわゆる本業と社会的意義の融合のような形で動ける企業や企業人はまだまだ少ないなと思っています。

ただ、このCSRという言葉の定義がぼやっとしているので、それを逆手にとって、CSRという傘をかぶせることで一緒に仲よくできるのだったら、CSRだといっ

て社会づくり、パブリックの役割を担ってほしい、と思っているのです。短期的な目先のビジネスについてはライバル企業同士のぎを削りつつも、長期的には一緒に社会づくりをしていく。CSRという緩やかな関係性で動ける仕組みが、ローカルグッドにはあります。そこから何か新しい共創の形を見出しているのではないかと、すごく期待しているのです。

【江森】 おもしろいですね。私のCSRの考え方は全く逆で、まさにその本業のところ、有料か無料かに関係なく、我々の会社のリソースを使って解決できることがあるのであればやりなさい、と。CSRとかCSVとかいろいろ言いますが、私はCSR、企業の社会的責任という言葉にこだわっています。企業の社会的責任とは何かというと、やはり新しいマーケットの創造、そして雇用を生み出していくということだと思います。

自動化してロボット化すればするほど雇用はなくなっていくわけで、やはりそれではいけない。大量生産型の生産性を上げていくタイプのイノベーションではなく、新しい

仕事をつくっていくことを意識してやっています。

きちんと社会課題と向き合っていて、それが利益を生むかとは別に、その問題を我々が解決できるのかどうかということに真剣に取り組んでみる。解決できるなら、多分その先にビジネスのチャンスがあるのだからと思います。

【市川】 自分がCSRとして取り組んでいることについて、その妥当性を測るメジャーメントが全くないと感じています。この取組を本業としてやるならいくらぐらいの価値がある、というふうに言ったとしても、なかなかそれが伝わらないのです。ローカルグッドも、自分では本業ないしはそれ以上のバリューを出していると思うのですが、それを測るすべがない。

【影山】 経営的意味が問われる企業の現場で市川さんがCSRをパブリックのために使っていることと、まず社会課題に取り組み経営的意味はその後についてくるという江森さんのお考えは、矛盾しないと思います。近代社会は、成長していく過程で合理性を貫ける領域をどんどん取り込んでいく、もしくは合理

的に突き進んでいきます。つまり、採算がとれるところは企業が、採算がとれない領域は公の領域になっていくわけですが、これが限界に来てい

る。今まで行政が担っていた領域が、行政だけでは担えない、NPOでは不十分となった時、企業がCSRという形で担うというのはいずれ得ることです。それが社会の支持を得るのであれば、永続という経営の意味は後からついてきます。

しかし、合理主義の領域では、後からついてくる経営の意味がまず問われることもあり、し、合理主義の社会は指標化が重要ですから、SROI（社会的投資収益率）やソーシャルインパクトを測る、などの要請が出てくるのではないかと思います。

【藤原】 CSRというものがあいまいで定義ができないということは非常に重要で、それがゆえに公共性が担保できると思っています。企業の合理性や経済論理の中に完璧に組み込めるようなロジックが構築された瞬間に単なる企業活動になって、パブリックではなくなくなってしまふ。どう取り組むべきかなどの議論の余地が残っているがゆえにパブ

リックたりええると思うのです。

だから、本格的に企業が公共を担う、つまり企業がそれをマーケットとしてとらえるということは、行政が担っていた公平で大きなプラットフォームを、誰かが経営することになるわけです。経営に置きかわり経営効率・効率化ということが出てきた瞬間に、大変なことが起きるのではないか。経営の視点から見直すというのはいいのですが、経営的に行政を動かすというのはまた全然違うことで、制度設計というのがかなり重要ですね。

○司会 では、経営とCSRの話が一つのトレンドとしてなっている現在、どのように取り込んでいけばいいのでしょうか。

【影山】 システムがカギになると思っています。合理主義だけでいくと、無理な切り詰めも生じ、結果、不祥事を起こし倒産に至る企業も出てきます。企業も、新しい観点を導入していかないといいけない、というのがCSRのメッセージであったと思います。しかし、システム化が図られないと、CSRは機能しま

せん。例えば、行政業務を企業に任せればうまくいくというの間違いで、市民にチェックされて何か問題があれば批判やボイコットが起きるような社会でなければ、企業が誠実に業務をこなすとは限らないのです。

3 コミュニティ経済を創りだすICTプラットフォーム

○司会 先ほど江森さんがおっしゃられたように、これまでの合理化というのは、雇用

用のある部分で切り捨てていく、いわゆる困難を抱えている方々を排除していくという仕組みだっただけだと思いません。ローカルグッドでは、コミュニティ経済ということを通じて、困難を抱える人たちを含めた雇用を生み出そうとしています。家族や企業のセーフティネットが解体されていく中で、もう一度新しく雇用を通じたセーフティネットを張り直そうというのが、ローカルグッドの一つの重要な目的ですね。

【江森】 ローカルグッドの意味の一つは、新しい金融システムをつくっていくということだと思っております。

横浜型地域貢献企業支援事業（注1）のもとになった横浜JCマニフェスト（注2）というのをつくったときに感じたのが、金融機関は国際的なグローバルゼーションの金融基準に基づいて経営をしているので、彼らはグローバル

な人たちなのですよ。グローバルな人たちがローカルの人たちに対して、どのぐらい採算性とかそういうものかというところを出せないわけですか。そこですれ違いが起き地域にお金が回ってこないと行き詰まってしまう。ローカルグッドはグローバルゼーションと一線を描き新しい金融システムになり得ます。それで全て解決できるとは思っていませんが、一つの解決策としては期待ができる。

○司会 ローカルグッドでは、市民からお金を調達することで、行政が関わりすぎることなく、事業を回していくような仕組みとして平成26年11月にクラウドファンディングをスタートしています。第1弾として実施した3つのプロジェクトは全て目標金額を達成していますね。

【江森】 採算がとれるかとい

う合理性ではなく、応援したかどうかという感性でお金が動く、そこで儲かるかどうかということとは二の次で、頑張っている気持ちで地域でお金として回っていく。すごく期待できますよね。

【市川】 そうですね、江森さんがおっしゃられたように、新しい機能を地域社会で担っていくものだろうと思っております。とはいえ、感性で訴えるというのは、今そこにある課題について共感を得やすい反面、例えば、私が今CSRとして行っている教育分野では、公的なお金や地域の方々の支援というのが集まりにくいのです。顕在化した課題ではない予防的な取組は、効果が見えるまで時間がかかり、投じたお金に対してどれぐらい効果をもたらすのか、例えば100万円投じたら5人分の雇用が生まれるといった相関性が見えにくいと思うのです。ソーシャル・インパクト・ボンド（SIB）のような仕組みをSROIの設計の中で組み込んでいかないと、予防的な取組に対してはなかなか支援が集まりづらいな、と感じています。

【江森】 自分のお金がどこに

いつてしまうのか見えないと、参加しづらいというのがありますね。

○司会 ローカルグッドで行ったクラウドファンディングの一つであるバイタイン(注3)は、一番お金が集まりにくいと思ったのですが、目標金額を達成していますね。そういう意味では、潜在的にソーシャル・インパクト・ボンドのようなことができる土壌が形成されてきているのではないのでしょうか。

【藤原】 コミュニティと金融ということから新しいものを創り出していくことは応援していきたいし、クラウドファンディングだけでなく、いかに既存の金融システムからのサポートやコラボレーションが生まれるかが重要ですね。例えば、ファンディングしたら税金が目に見える形で減るというように、わかりやすい仕組みが必要かなと思います。

また、金融のほかに教育もとても重要で、地域行政が抱える一番深いテーマだと思います。

20世紀最大の教育学者の一人であるブラジルのパウロ・フレイレは、演劇を教育理論

に導入しました。それは自分の今の立場というのを演劇化して、ロールプレイのこらえていくと、今自分がどういう立場に置かれているかというのを客観視でき、それを乗り越えるためにどうしたらいいかを考える。小さい時からそういうトレーニングをやっていると、弱者が状況を把握して乗り越えるという人生で最も重要なスキルが身につく。

○司会 イノベータータイプな人間をどう育てていくかというのはすごく大事ですね。

【藤原】 数値化できないことはとかく軽視されてしましますが、むしろ、みんながそう思うのだったらそこには価値がない、というふうに反転してとらえてみるというのが演劇的な、乗り越え型の思考ということだと思います。合理性というのは全員同じように考えてしまうというリスクがあります。

【影山】 社会や仕事のあり方を変えるといった局面でいうと、システムイメージを持ってるようにすることが創造性につながるかもしれません。ローカルグッドは、CSRを

想定していて、企業が戦略的に関われます。場合によっては、NPOからノウハウを得たり、新しいビジネスになるかもしれません。なぜCSRかNPOかとシステム論的に説明すると、課題があるのは即自的感性主義の領域である生活の領域です。理性主義の領域とは水と油で、その部分を行政が国家福祉の形でカバーしてきましたが、行政も理性主義の機構なので、現代では十分な対応ができません。そこで2つの領域をつなぐものとしてCSRやNPOが重要になってくるのです。

バイタインは、その良い例で、企業のロジックに訴えかけて、つながりとしていきます。これを実現するツールになるのがローカルグッドだと私は思っています。

つまり、市川さんが先ほど言われていたように、感性的なものにどう対応するかが、企業の課題になってきています。社会の感性的な声に耳を傾けないと収益性にも問題が生ずるといって、合理性に訴えかける構図になっていきます。それがローカルグッドには組み込まれているのです。

ただ、成果が見えないと人間はなかなか行動しづらい。日本人は、日本的システムの

中で共同体の運営を担う人に全部移譲してしまう。そうするとシステム全体をみて自分のやったことがどう反映しているかというイメージを持ちにくい。運営者が全部やってくれるからです。例えば、寄附すると自分たちこう返ってくるのか、社会がこ

うよくなるというイメージを持ちにくいので、行動しにくくなってしまいます。バイタインには生徒たちがこう変わってきたという企業の声が出ていて、それが感性に訴えかけたところがあつたと思いますし、まさにそれが新しいマーケットのつくり方においては大事なのではないかと思います。そこに、新たな社会を作ろうとする創造性を育む契機があると思います。

○司会 創造的な知というのは非常に重要で、コミュニ



注1 横浜型地域貢献企業支援事業 公益財団法人横浜企業経営支援財団が行っている事業で、横浜市民の積極的な雇用や取引における市内企業の重視など地域を意識した経営を行い、さらに地域ボランティア活動などの社会的事業に取り組んでいる企業を認定して、支援する制度。

注2 横浜JCMニフェスト 社団法人 横浜青年会議所が、横浜

の目指すべき方向性やあるべき姿を具体的に数値目標や期限とともにマニフェストとして示したもので2005年に発表された。

注3 バイタイン

職業的経験であるアルバイトと、企業内の教育的なインターンシップをかけたあわせ新しい「中間的就労」のモデル。(32ページ参照)

テイ経済とクリエイティブな産業というのを両立させるのが新しい日本社会のイメージとも言えるのでしょうか。

【江森】やはり表現力というか、どう表現していくかということがすごく大事で、映像などを使ってクリエイティブに見せていくのも一つですし、指標として見える化するのも同じような効果があると思うので、その両方が大事だろうと思うのです。

長期にわたる課題は、表現も数値化も難しいので、見えにくくなるので、そこは、もしかしたら最後まで行政の役割として残る部分なのかもしれないな、と話を聞いていて感じました。

4 地域を担う存在を育む

【藤原】困っているとか怒っているという状況で重要なのは工夫しようとする創造的な精神です。受け身で困っていてもだめで、その状況を表現していけば、みんなに伝わって新しい産業、マーケットが生まれる。とにかく工夫して自分を表現さえすれば、人とかかわり合いが増大し、関係性が複雑になり大きくなれば、それはマーケットになり

える。例えば、毎日みんなに「こんにちは」と言って気持ちよくあいさつしながら道を掃除していたら、あのいい感じの人だから子供をちょっと預けてみようとか、人との関わりが仕事になっていくと思うのです。発想を転換すれば、交換経済みたいなものを生むかもしれない。その人となりがろう、伝えようという精神によって、数字には現れてこない豊かさというものを獲得できると思うのです。

【市川】もともとこのローカルグッドは、顕在化している社会問題をどうしたら創発的に解決できるかという問題意識からスタートしましたが、金融システムとしての側面のみならず、教育という側面でも寄与できるかなと思っています。課題がちゃんとそこにバイアスがかからずに素材として乗っかってくるということも思っているのです。

今、学習指導要領の改訂の中で、アクティブラーニングといって主体性を持ってイシューベースで行動を起こすような教育を目指しているようなのです。子供たちが自分たちの地域で何が起きているのかを感じることで内発的動

機が刺激されて、何かやろうという気持ち芽生えるかもしれないですね。そして、出てくる答えは当然合理主義的なものではなくて、40人いれば40通りの答えがあるかもしれない。そういった新しい教育の場での活用という可能性もあるという気がしますね。

【藤原】例えば、学級会で困っている人をみんなで助けようとなったときに、小学生はお金は出せないけど手紙は書けるとか、こういうサポートならできるといふことになると素敵だなと思います。

【市川】支援側・被支援側という構造ではない、支援する側も得られるものがあると思うのですね。「ありがとう」の一言でも、子供にとつて一生の思い出や宝になります。

【影山】今おっしゃったアクティブラーニングですが、教室でディスカッションさせるのもそうだと言われていますが、地域人材を育てるためには、それでは不十分です。実際にまちに出て現実の問題に触れて自分で考えてみる。これが創造性や想像力、新しい姿勢を持った人間を育てていくような気がします。しかし、

今の教育体系ではそれがしにくい。バイタンの意味はそこにあると思うのです。

つまり、バイタンのような労働市場をつくる話と教育の話は、つながっているような気がします。企業の現実だとか社会の現実に触れると、その学生は問題意識が非常に高くなっている。これも一つのオープンイノベーションだと思っております。

地域で育った人材に、地域の人材として活躍してもらおうという構図が必要で、そのために、インターンシップでNPOや企業に行ってみたり、また、企業がCSRでそれを受け入れるというのも重要だと思っております。

【江森】インターンシップは現在大学生が主流ですが、中学や高校というもつと早い段階で授業の一環に取り入れることが、地域の人材育成にいきてくると思います。

【藤原】高校生に対してソーシャルな問題を考えさせるといふことは既に一部でやっているとは思いますが、最終的には中学校ぐらいから始めて、自分の進路選択に連動したら良いかなと思います。このローカルグッドというのは

小さな一歩ですが、義務教育のあり方を大きく変えていくきっかけになるかもしれない。

【司会】教育に對話と体験を持ち込むというのは以前からあったのですが、それが職業選択とか人生の選択に結びつくものかといえば、そうやってはいなかったと思うのです。對話と体験をきちんと教育に導入することによって、10代後半で自分の人生を選択していけるような仕組み、環境をつくっていくことが、これからの社会を考えていく上で大事なのだと思います。

【影山】私も對話と体験が大事だと思います。感性というのは接触性の認識ツールなので、接触させないといけないのです。ただ、大学内では模範的なものにならざるを得ない。それに対してローカルグッドの仕組みの中には、地域でヒアリングをしたり、NPOと一緒に課題をつくり込むという活動があつて、ゼミでそれに参画してみたいと思っております。こういうことができる横浜は、恵まれているという気がしますね。

【司会】確かにそうですね。

地域にヒアリングに行くとか、ローカルグッドのいろいろな局面を若い人が手伝っていくというようなことを、小学生、中学生、高校生にまで広げていけると、創造的な精神を持った子供たちが育っていくのかなと思います。ローカルグッドの試みは、最初の一步かもしれないですが、そこから展開し、広げていく、いろいろな可能性を持ったプラットフォームなのだろうなと、改めて思いました。

では、最後に、横浜市におけるオープンイノベーションに期待すること、苦言も含めて何かだけいただけますか。

【市川】 ローカルグッドを始めた当初から感じていることですが、一部の意識の高い人だけではなく、あまねく地域の人々に広げていくということが僕たちのミッションなのだと思いますので、そこを意識して取り組んでいきたいですね。

また、横浜の地域性というのを考えた時、開かれている港町的な特性というのがあって、だからこそローカルグッドが始まったという面があると思うのです。横浜の場合は結果的に諸条件がそろったからと言えるところがあるので

すが、ほかの地域で同様にスタートし成功させるためにはどうすればいいのか、今後もディスカッションしていきたいと思っています。

【影山】 苦言になるかもしれませんが。行政の方はやはり公平性とか公明性ということが大事なので、自分で線引きをしてしまうところがあるのですが、オープンイノベーションというのはこれを破ることが重要だと思っております。行政があつてその下に経済や社会があるのでなくて、全部で一つの地域社会をつくっているわけです。行政職員も地域に出ていいたら地域のメンバーであつて、地域のオープンイノベーションで生み出されたものが、地域に役立つのだという視点で主体的にコミットしていただくことが大事だと思っております。

【江森】 行政の職員が、職員という立場はあるにしても、一人の人間として地域にどうコミットしているか。横浜、市職員という肩書があつて、持っている情報などを自分のリソースとしてうまく活用して、地域のために貢献するのだという気持ちに変わっていくと、とても良くなってくる

のではないかと思うのです。

【藤原】 繰り返しですがローカルグッドヨコハマが、組織ではなくプロジェクトであること自体が、まず大きな価値を持つていると思つています。市民や企業の人、大学にとつても、横浜市という組織に協力するより、プロジェクトに協力するというほうが非常にオープンでアクセスしやすい気がします。例えばヨコハマG30もすごく成功しましたし、待機児童をなくすというのもすごく成功しました。それは市の政策というよりも、共感を生むプロジェクトであり、オープンな価値を示せていたのだと思います。

また、横浜には、先進的な条例がたくさんあり、かつては日本の地域行政のリーダーシップを取つていたので、ここしばらくは全国初の条例もありません。プロジェクトも条例もがんばつて欲しいなと思います。プロジェクトは他者がアクセスできて、条例はアクセスしにくい専門的なものですが、重要な下支えになります。それが地域の可能性というのを開いてくのだと思います。大いに期待したいなと思いますね。そのときに気をつけなければ

ばいけないのは、イベントとプロジェクトは違うということです。イベントというのは縦割り予算をつけるタイプのむしろ受け身型です。プロジェクトというのは、こういうことが重要だからやるべきと発意して、共感が集まり横断的にやっていく。ある違う質的な目標に向かって、どうやるかを工夫していくということだと思つています。

当初プロジェクトとして始まったものでも、イベント化して、形骸化することによって、起きるので、みんなが意識して、これはイベント化しているから変えようと部局のチームリーダーや首長が言えるようになる、すごくクリエイティブな社会になりますよな。

○司会 イベントになりかかったらプロジェクトに戻すということをやり返けられるといいと思いますし、ローカルグッドはそれを可能にする仕組みになる可能性があると思つています。

【藤原】 批判に対して頑固に抵抗するのではなく、受け入れて意見が変わればそれは相当クリエイティブで、その時に前に進めるかがすごく重要

ですよ。

○司会 そういう点では、その柔軟性が創造的な知の可能性であり、そういう柔軟性を持った人材を育てるといことが、新しい社会を切り開いていくことの非常に大きなポイントになるのではないのでしょうか。今日は、どうもありがとうございました。

